



# HIWAINARU FANTASY XIII Vol.2

V+  
Versus

専横なるファンタジー XIII vol.2 + ヴァルゼス



**R18**  
成年指定



「……何だか…凄く寝苦しい……」  
深い眠りについていたスノウは、  
下腹部に違和感を感じて目を覚ました。

ふふふ  
ふふふ

はあ

はあ

ふふふ

ぐら

「はあ……はあ……」

「？」

「ね、姉さん?!—体何を?!—」

「う、うるさい……黙って寝てる……んぐ……」

「でも!お、俺にはセラが……」



「わ、私は、お前とセラの婚約など認めていない……」  
「そ、それにお前が起きなければよかったんだ。」

「い、いやっ……起きなければ……」  
「……そんな無茶な……」  
そう言いながら、スノウは立ち上がり一旦身を引こうとした。











「ん！んはあああああああ……！」  
（ああ！口に！口の中に出されてる！ドドロドロしたのが喉まれえ……！！）

絶頂を迎えたスノウの中で、  
理性の糸が切れた。



「くっ……」

「あっ!？」

気が付くと、スノウはライトニングを押し倒していた。

プル

ガ  
ミ  
ッ

「そんなに精液が欲しいなら、直接中に流し込んでやるよ!」  
「だ、ダメだ……い、今いったばかりだから凄く敏感に……」  
ライトニングが喋り終わるのを待たずに、スノウはガチガチに回復した肉棒を一気に差し込んだ。







「こりゃ淫乱なんか通り越して、もう変態だな！」

「この変態女！人が寝てる間に銜え込んで興奮してたのか！？」

「はひっ！興奮してまひたあ！銜え込んでオマンコ濡らしれまひたあ！」

「ホントは……！ホントは、スノウが目覚まして犯されるの想像してまひたあ……！」

「想像しながらオナニーひてまひたあ……！」

「こめんなひやい！ゆ、許ひてくりやしやひい……！」

「くっ……。ほんとに普通の姉さんとは大違いの変態だな！」  
「そんなに犯されたいなら、変態マンコにザーメン流し込んでやるから  
たっぷり味わえ……！」

「くらはい！変態マンコにザーメン流し込んれええ……！」

「く……！」









「ふふっ……私の可愛いペット……」  
「今夜も、私のために動きなさい。」  
「さあ、そのいやらしい触手で私の口を犯しなさい。」

「ふっ」





「レロ……んふ……」  
「私、凄く濡れてる……」  
「んふう……全身ヌルヌルして……」

「気持ちいい……ん」

「じゅるる……ちゅば……じゅぶっ!!」  
「んっ……もう……いいわ……」  
「……オマンコに入れなさい……」

「んっ……んっ……んっ……」



「はあっ……んん……」

「そ……そうよ……」

「そのままかき回して……」

「ああ・もつとやさしくして……」

「オマン」熱くて……おかしく……なりそうなの……」

「ひっ……も、もつと優しくって言うてるでしょう!」

「あああ……!ズルズル……中でズルズル動いてる……」

「激し……くっ……!」

ドド……

ドド……

グキョ  
グキョ  
グキョ

「も、もうイカせなさい!」

「我慢……出来ない……」

「!?!」

「だ……ダメよ……そ」は違うわ!」

「そ」はおしり!……」





「あああっ!!」

「だっ、ダメだって言ってるでしょう!!」

「お、おしりは・・・」

「おしりは弱いんだから!!」

「うっ・・・動かさないでえ!」

「オマンコとおしり一緒に入れられたら・・・」

「きっ・・・気持ち良過ぎて・・・お・・・おかひくなる・・・!」

ド...

ズル

ゴウ

ウ...

ゴ...

ゴ...

ゴ...

ゴ...

ゴ...

ゴ...

「ふあああっ!!」

「きちやうっ!!」

「両方がき回されてイっちやう!!」

「あ・・・ダメ・・・もっ...

「ひぐっ!!」

「ひっちやうっ!!」





「ひああああああっ！」

「おひり。。。きもひいいいいいいいっ！」

ド

ブル

ブル

ブル

ブル



「今回はスゲー上玉だな。」

「今夜は楽しくなりそうだ。」

「?!!...何だか話声が聞こえる?でも暗くて何も見えない...」

「お?気が付いたみたいだぜ。」

「やっとお目覚めかよ、待ちくたびれたぜ。」

「せっかくだから目隠し外そうぜ。」

「そうだな。」

「な、何?目隠し?」

「...きやつ!」





「ごめん」

「きゃっ！」

（私・裸？なんでこんな所に?!）

「だ、誰なんですか・・・あなた達・・・私をどうする気なの?」

「どうするもこうするも、自分の格好見たらわかんだろ?」

「っ.....」

「嫌っ！はっ、離して.....」

「離さない!」

「でないと!」



「んぐう?」

「あ、悪い。あんまりうるさいんで塞いじまった。」  
「なら俺は、この綺麗な乳で遊ばせてもらうかな。」

「んぐっ!んんっ!んん!!」

(いやっ!ちっ、乳首...乳首が!!)

「ん?何?もっと喉の奥まで突っ込んで欲しいって?」

「んんっ!んんん!んんんん!」

(違う!誰がそんな...)

「!!」

ギ  
ハッ  
ン

グ  
グ

ジュ  
ム  
ム  
ト  
ロ  
...

ギ  
ハッ  
ン



「んぐうううううっ！！！！」

「おお！すげー！喉の奥にカリが引つかかってやがる！」

「もがっ！！じゅろっ！！じゅろっ！！」

（やだっ・・・昔しい・・・喉の奥で亀頭が出たり入ったり・・・）

「涎もすげーなあ。綺麗な胸がベトベトじゃねえか。」

「んぼ・・・じゅるるー！」

（涎・・・凄いいねっとりしてる・・・は、恥ずかしい・・・）

「涎のせいか、あんまり苦しそうじゃねえな。」

「それともこんなのが好きなのかお前。」

「！！」

「ひっ！ひがふっ！ひがふもっ！！」

（違う！違う・・・私・・・、「こんなので感じてなんか・・・」）

「ちょっと立たせて、確かめてみようぜ。」

「ん・・・ずるっ・・・や、やめて・・・！！」

キョウウ

キョウ



ズロ...

ゴ...

グ...



「おいおい、なんだこりゃ？」

「おわっ！すげーな、漏らしたみてえになっぺんじゃねえか。」

「なんだお前、こんなことされて喜んでんのか？ひよつとしてマゾ女？」

「ちっ……違うー！」

「私……マゾなんかじゃ……！」

トキトキ  
ズル

「んじゃこれはなんだよ、俺達まだお前のマンコ触ってもいねえんだぜ？」  
「まあ、どっちでもいいじゃねえか、手間がはぶけただけだ」  
「このままぶち込んでやるよ。」

「イヤっ！そ……それだけは……！」

（い……今入れられたら……多分……私……）















お久しぶりです！または、初めまして(^v^)  
 灰雷兎です。

またもやっちゃいました(;´ω`)  
 車限なるファンタジー・第2弾です。

アレです、新しいトレーラーが  
出るたびに描きたい衝動が  
抑えられなくなるんです(;´ω`)

しかし、なんというか  
新しいトレーラーが出るたびに  
FF10ばりに切なそうなストーリーのようですね。

個人的には10は大好きで  
何度泣かされたか解りません。  
 (´;ω;`)ぶわっ

なので13も物凄いい期待してたりします。

ああああ早くプレイしたああい！  
 (´Д`)ハァハァ

(´Д`)

それでは、  
ここまで目を通して頂いて  
ありがとうございました。

またお会いできることを  
願いつつ(;´ω`)シ

灰雷兎

## HIWAINARU FANTASY XIII Vol.2

Versus

**発行日** 2009年10月

**発売元** きゃろっとワークス

**発行者** 灰雷兎  
 HP: <http://johnny-do.com/raito/>  
 Mail: [carrot@johnny-do.com](mailto:carrot@johnny-do.com)

**印刷** 栄光様

※本作品の無断複製・無断転載・Webへのアップロード禁止  
 ※18才未満の購入・購読を禁止します





きゃらっとワークス/灰雷兔  
2009/10